



▼いい人生は「ありがとう」がつくる▼

校長 小田 恵

この言葉は文筆家で精神科医でもあった斎藤茂太氏の本のタイトルです。

このフレーズに私はとても共感をおぼえました。日常小さなことにも「ありがとう」と感謝の気持ちをことばに表すことで、なんとなく心が軽く明るくなるように感じられます。もちろん、感謝の気持ちがなければ、このことばは生れてきません。

5月になって、NHKでは「君の声が聴きたい」プロジェクトを始め、子どもや若者の幸せについて考える40以上の番組を放映しています。すべての番組を見ることはできませんでしたが、昨今の青少年の一面が捉えられており、様々な問題意識を持たせてくれました。このプロジェクトは2020年の国連児童基金（ユニセフ）調査で日本の若者・子どもの「精神的幸福度」が38カ国中37位の結果をうけて企画されたとのことですが、いずれにせ「37位」という結果には少なからず衝撃を受けました。

身体的健康にも恵まれ、経済・保健衛生面でも恵まれているはずの日本で、なぜ若者たちは「幸福」と感じていないのか。さまざまな理由が挙げられています。自分で努力した結果として得られた生活ではないから、感謝の気持ちがなく満足感もないからだ、とか、日本は自由と寛容に欠けるからだ、とか、役立つことばかり求められているからだ、などなど。

洛星の生徒たちについてはどうなのでしょう。自分たちがいかに恵まれているかを認識し、感謝の心を持って日々生活しているのでしょうか。日常生活のなか小さなことにも素直に「ありがとう」ということばを口に田せているのでしょうか。

先日私は東京でのカトリック学校の理事長・校長の研修会に参加し、数多くの言葉を心に刻んで帰ってきました。校長に就任して間もない私にとって、強く心に残っているのは、批評家の若松英輔氏と東大教授の山本芳久氏の対談の中でなされた「勉強と学びが混在している」ことの指摘です。「勉強」には答えが存在し、なるべき姿は「人材」と決められているが、「学び」とはどうその「人」になっていくかということである。つまり、ある目的に対応する「人材」ではなく「人間」であるために学ぶのである、というものです。

昨今「人材」という語は教育現場でもよく用いられます。しかし、よく考えると、「人」を「材」とする考え方は、「神から無条件に愛されている存在」という考えと相容れないものです。

コロナ禍の中で若者たち（もちろん洛星の生徒たちも）は、平静を装いつつも必死に希望の光を求めているのでしょうか。大人たちが、そんな若者たちを「材」とみなすのではなく、彼らに寄り添っていけるように、また、一人ひとりが神から授かったタレントに気づき、感謝の心を抱けるようであってほしいと切に望みます。そして何より、洛星は一人ひとりがタレントを伸ばし「人」になっていくための学びの場でなければなりません。

ゴールデンウィークの期間に多くの気づきを与えてくださった神に感謝します。

「ありがとう。」